

18.子ども食堂の存在の重要性：東山ぐうぐう食堂の経験を通して

早津美帆

子ども食堂とは

子ども食堂を Wikipedia で検索すると「子どもや親、地域の人々に対し無料または安価で栄養のある食事や温かな団らんを提供するための日本の社会活動」と示されている。私は成ゼミに入り、授業や自分が実際に子ども食堂に参加するまでは子ども食堂は子どもたちのことだけが考えられた取り組みなのだと思い込んでいた。しかし、この1年間で大須子ども食堂、おばあちゃん家はひまわり邸食堂、西福寺おかげさま食堂、東山ぐうぐう食堂、ほんわか食堂と5カ所の子ども食堂に参加し、例外はあるものの、ほとんどの子ども食堂が子どもだけでなく、高齢者などのお客さんとしてくる人やスタッフのために子ども食堂をおこなっているということを知ることが出来た。そして子ども食堂はお客さんとして来る側の居場所になるだけでなくスタッフ側の居場所にもなることを感じた。それを強く感じたのは東山ぐうぐう食堂に参加したときである。

・東山ぐうぐう食堂での体験

東山ぐうぐう食堂は令和元年10月14日に開設され、月に1回行われており、現在の開催日数は4回でそのうち私は2回しか参加出来ていない。しかし、たった2回の参加でも私は東山ぐうぐう食堂に行き続けたいと思っている。そう思ったきっかけが子どもたちの私に向けてくれる言葉であった。11月4日に初めて東山ぐうぐう食堂に参加した時は、子ども達はおそらく見たことない年上の人が急に来たという認識で話しかける前に逃げてしまったり、話しかけても警戒したりしているように感じた。私自身大学生になる前から年の離れた子と関わる機会がまったくなかったのも、どう接したらいいのかわからない部分があり、接し方が悪かったのかもしれないが、うまくコミュニケーションをとることができなかった。そして2回目の参加となった12月16日も、前回と同じように子どもたちとうまくコミュニケーションをとれなかったらどうしようという不安がある中の参加ではあったが、子ども達と話す機会が多く、前回感じた不安を感じるものがほとんどなかった。普段の東山ぐうぐう食堂は祝日におこなわれるが、12月は平日開催のため子どもたちは学校が終わってから来るので、小学生低学年の子達が来るのが早く、会場設営や料理の下準備などの手伝いをしてくれたり、その後一緒にトランプをしたりと一緒に居る時間が長く、また、人見知りをあまりしない子達なのか子どもたちからもどんどん話かけてくれたこともあり、仲良くなるまでさほど時間はかからなかったように感じた。他の子ども食堂に参加した時は終盤でやっと話せたり、洗い物などの裏方をしてほとんど子どもたちと関わらないまま終わったりすることもあったので、子ども達と多く関わったことがまずうれしかった。そして、東山ぐうぐう食堂では毎回地域の方がマジックを披露してくださるのだが、その時も「一緒に見よう！」と言って、私の膝にのってきてくれたり、ご飯の時には「隣に座って！」と言って、私たち学生ボランティアがご飯をよそっているのを待っていてくれたり、ご飯を食べ終わった後は「遊ぼう！」と言って服を引っ張ってくれたり、その1つ1つの言葉や行動が本当にうれしく感じた。

小学校低学年の子以外にも、ほとんどの人が帰っていく19時頃にまだ会場に残っていた代表の黒さんのお子さんや数人の子達とトランプやUNOをして遊び、会場の片付けをした

後も少し鬼ごっこなどをして遊んで過ごしていた。そして、私達が帰るときに最後まで一緒に遊んでいた子が「来月の子ども食堂にも来る？」と聞いてくれたのがとても印象に残っており、1月は成人式のため参加出来ないことがわかっていたので、2月は必ず参加しようと思ったとともに、子ども食堂に参加してよかったと1番思った瞬間であった。すごく些細な質問ではあるが、うまく子どもたちと関わっているのか、ボランティアとして少しでも役に立っているのか不安な部分が多かったので、その言葉を聞いて自分たちと遊んで子どもたちが楽しいと感じ、また遊びたいと思ってくれたことを感じ、少し自分の子ども食堂に関わる意味を感じられたように思う。

私は今一人暮らしをしていて、よく関わる人といえば大学の友達や教授、アルバイト先が同じ学生、パートさん、社員の人くらいである。もし子ども食堂に参加していなかったら4年間その狭いコミュニティの中で終わっていたのかもしれない。しかし、子ども食堂に参加したことで月に1回ではあるが関わる人の人数や世代の幅が広がり、まだ2回の参加で居場所とは言えないが、自分の居場所になったら良いと思える場所を見つけることができた。子ども食堂があることで私のように自分がいてもいい、必要とされていると思える場所に出会え、その出会いにより勇気づけられる人は多いと考える。大きさかも知れないが、私はあまり人付き合いが得意ではないので、小学生から高校生まで同年代では普通に仲の良い友達はそれなりにいたが、特別仲の良い友達と思えるような存在に出会うことができなかった。それは中学生の時に部活内のメンバーとうまく関係を築けなかった過去が関係し、長く一緒に居るとうまくいかなくなるのではないかと、自分の全てを受け入れてはくれないのではないかと心の中で感じ、離れられることが怖いので、ある程度の距離を最初から保つように自然となってしまっていたのかもしれない。それにより、自分の居場所とよべる場所が自分の部屋くらいしか今までは思いつかなかった。だからこそ、子ども食堂のように自分の居場所なれば良いと思える場所を見つけられたことはとてもうれしいのだ。子ども食堂では、スタッフの大人の方々も学生の私達を気にかけて、輪の中に入れてくださったり、子どもたちは良くも悪くも素直なので、子どもたちの言葉、態度でなんとなく自分をどう思っているのか感じ取ることが出来たりする。それが怖いときもあるが、東山ぐうぐう食堂にいた子どもたちのように受け入れてくれている時はすぐに感じ取れ、そこに嘘がないこともわかるので、そこが子ども食堂を居場所としたいと思う理由だと考える。

私やスタッフに限ったことではなく、お客さんとして参加する人にも同じように思っている人は存在すると考える。だからこそ、子ども食堂に毎回のように参加してくれるひとがいるのだろう。人は楽しいと思わなかったら、強制ではない場所にわざわざ出てこないと思うので、リピーターの多い子ども食堂はそれだけの人の居場所になっていると言えると思う。このように子どもだけでなく運営側、お客さんとしてくる側など子ども食堂に関わる人全てを含んだ多くの人の居場所となり、支えとなるというのは子ども食堂に関わった人にしかわからないが、それが子ども食堂の潜在的な可能性だと考える。

私はこの様々な人の居場所となる子ども食堂をもっと多くの人に利用してもらいたいのだが、豊田の子ども食堂には少し問題がある。東山ぐうぐう食堂で考えてみると、東山ぐうぐう食堂は市営東山住宅の中央集会所で開催されているのだが、ここには近くに駐車場がないため地域の人は歩いて参加している。そのため地域外からは参加しにくいのである。豊田市のおいでんバスが出てはいるが、そのバスも1時間に数本、そして祝日は最終が早いた

め、参加したとしても時間を気にしなくてはならない。開催する場所、作る料理の量、寄付が受けられる量に限りがあり、さらに東山ぐうぐう食堂は地域を対象としているため、このままでもよいのかもしれないが、これだけ暖かく、居心地のよい空間なので、地域内で終わってしまうのは個人的にはもったいないと感じてしまう。豊田市に住んでいる人で子ども食堂に参加したいと思うなら、豊田市には東山ぐうぐう食堂の他にも子ども食堂があるので、駐車場がある子ども食堂に行けば解決することだとも言えるが、私は5カ所の子ども食堂に参加して、それぞれ違った雰囲気があると感じ、子ども食堂ならどこでも居場所になるわけではないのだと考えたため、東山ぐうぐう食堂の雰囲気が良いと思ってくれる人も中にはいると思う。そういう人を受け入れられるような体制を作ることが課題といえるだろう。東山ぐうぐう食堂はまだ始まったばかりで、地域外の人を考える前に他の課題があり、すぐに解決策を見つけることはできないが、私に出来る範囲のことで今後対策を考えたいと思う。

・人との繋がりから生まれる子どもの成長

そして子ども食堂は居場所となるとともに、新たな繋がりを作り出している。東山ぐうぐう食堂でいったら地域の繋がり、西福寺おかげさま食堂でいったら親と親、子と子の繋がりなどである。繋がりがあることで頼れる人を身近で作ることが出来たり、自分の家族を見直すきっかけにもなったりすると考える。そう感じたのは、先程も述べたなかよしご飯の速水あけみさんのお話を聞いたときだ。速水さんは子ども食堂に来る子で宿題を持ってきて、勉強する子がいるが、床に座って勉強したり、電気を背に勉強したりしている子がいると話しており、私も小さいとき祖母に同じ事で注意されたことを思い出した。こういうことは当たり前のように思うが、注意されないとしてはいけないことだという認識にならない。親が気にしなかった点を子ども食堂などで目にした他の大人が子ども本人に注意することで子どもの成長につなげることが出来る。「いただきます」「ごちそうさま」の挨拶もそうである。親が気にしなかったら家で食べるときには言わなくてもいいが、そのまま成長すると言わないことが普通になり、友達の家でごちそうになるとき、大事な食事会などで行儀が悪い子、礼儀正しくない子などというレッテルを子どもが貼られてしまう可能性がある。その子自身が損する可能性があるのである。しかし、子ども食堂などに参加し、スタッフや他の親が声をかけるだけで防ぐことが出来る問題でもある。親が全て注意しなければいけないということはなく、親となる人も自分の育ってきた環境により、気づく点・気づけない点はそれぞれあると思うので、家族だけでなく、子ども食堂や地域で子育てをするという認識になれば、今とは違う新たな社会のかたちを子ども食堂が作ることになるのではないだろうか。また、速水さんの言葉で印象に残っているものがまだあり、それは「親は子ども食堂にきたときに、子どもは好き嫌いが無いと言う。しかし実際にご飯を出してみると、食べなかったりすることが多い理由は、親が子どもの好きなものしか出してないから。だから、子ども食堂では普段家では出さないようなものをだすようにしている」というものだ。それを聞き、本当に子どもたちのことを考えて子ども食堂をしているのだと感じた。確かに子ども食堂では実家ではでないものや、普段一人暮らしの家では作れないようなこった料理が出てくるときがある。そして、子ども食堂では苦手だから量を減らすというのは見たことがあるが、全部残している子はあまりみかけない。自分の家ではないという部分がそうさせるのだら

うか。このように子どもたちが普段家で体験しないことを体験させてあげられるかもしれないというのはことも子ども食堂が持つ可能性だと考える。

・今後の活動について

このように1年を通して私は子ども食堂には様々な可能性があることを感じた。しかし、ほとんどの子ども食堂は1回きりで、東山ぐうぐう食堂も2回しかまだ参加できていない。継続して参加し続けることが、自分の居場所作りや、子どもたちやスタッフの方々と関わる上で必要なことだと考える。また、より深くその子ども食堂の良さや問題点を見つけることにもつながるだろう。子ども食堂の良い部分だけでなく、参加するならば問題点を見つけ解決する所まで携わりたいと考えているので、3年生ではまず東山ぐうぐう食堂への参加を継続し、自分に出来ることを見つけていくことを課題としていきたいと考える。

【参考文献】

ウィキペディア 子ども食堂 （最終閲覧日 2020年1月27日）
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AD%90%E3%81%A9%E3%82%82%E9%A3%9F%E5%A0%82>